

【資料紹介】

「寛文元年二年 日帳」

石野 友康

石川県立図書館の森田文庫に「寛文元年二年 日帳」という史料がある。(請求番号K二〇八 一三 墨付二十四丁)。郷土史家として知られた森田柿園(平次)の旧蔵である。

寛文元年(一六六一)十月から翌二年七月までの約九ヶ月間の内容で、寛文初年の加賀藩領内の状況、とくに金沢城に関わる興味深い内容を含んでいることから全文を翻刻し、紹介したい。寛文元年といえば、五代藩主前田綱紀が初入国をはたし、保科正之の後見のもと、藩主として独り立ちしていこうとした時期でもあった。金沢城では、ながらく藩主不在であったが、石垣普請にみられるように、居城としての整備がなされていた。

本史料は、従来、柿園の著書として知られる『金沢古蹟志』などにも引用されたが、断片的であり、全文の翻刻が待たれるところであった。原本については未確認で、写本であるという制約はあるが、史料が少ない当該期にあつて貴重な文献史料であるといえる。筆者は不明であるが、おそらくは金沢に在住する藩の重臣とみられる。森田文庫のほかに金沢市立玉川図書館の加越能文庫「日記・残編五種」(請求番号一六・四〇一八)のなかに「寛文元年・二年日帳」として収められている。おそらく前田家編輯方による文書収集のなかから写本が作成され、森田文庫や加越能文庫に収められたのであろう。

なお、財団法人前田育徳会に「日帳」と題する前田綱紀の自筆の日記が所蔵されているが、別史料であることを付記しておきたい。

凡例

翻刻にあたり、原文を尊重したが、わかりやすい表記に統一するため、趣旨をそこなわない範囲において次の原則で表記を改めた。

- (一) 字体は常用漢字を原則としたが、而・茂・江・者・与などの変体仮名や^ちなどの合わせ字はそのままとし、正字・旧字の一部についてはそのままにしたものがある。
- (二) 表紙や朱書部分については、「」を付し、右肩に(表紙)、(朱書)と注記した。
- (三) 表敬の欠字・平出については、一字あけ、平出については右傍らに(平出)と注記した。
- (四) 抹消部分には文字の左側に^{々々々}を付け、原文に修正がある場合には、右側に示した。
- (五) 編者の付した傍注には()を付し、校訂箇所は「」で示した。

(表紙)
寛文元年二年日帳
(内題)
寛文元年二年

日帳

十月十五日

十月十六日

一、津田玄蕃先屋敷、長屋つくりい、住居仕直之事、御作事奉行申渡、
十九日

一、松任御旅屋雪垣道具、六年已前二請取候故、損申由木村^(馬廻組)甚左衛門、

即刻御作事へ申渡、

一、^(枳敷)きこくノミウへ、^(表紙)さいかちのミウへ、泉野辺二畠をいたし、植させ

候様二十村可申付旨、御算用場へ申渡、同廿一日二山本八兵衛二御

算用場へ参、^(表紙)ミウへノ事、申談候様二申付候、

一、堂形前三ツノ家ノ事、委細菊田長右衛門^(重賢・城番馬廻)・別所次左衛門^(定番馬廻)へ申渡候、

廿一日

一、御寝之間下ニシ、ミ貝敷候事、大くほ忠左衛門^(重直・小姓)へ申渡、

一、脇田助右衛門^(小松馬廻)のミ郡山奉行被成御赦免候付、小松辺材木御用之刻手つかへ可申候間、刑部与力之内一人充小松江相詰候様刑部方へ申遣、

一、玉様丸^(泉脱力)御馬屋立候土台石入候へ共、無之三付、御奉行小川又右衛門^(小姓)・平田善四郎^(小姓)断二付、戸室山ニて石切出候様二御ふしん奉行へ手紙遣候、

廿二日

一、御切米取為御加増被下候分、向後日割ニ仕間敷事、

一、此以後所々御作事方人用所切ニ一紙目録調、寄合所へ可申上旨、申渡候様三御作事諸方さん用場へ申渡、

寄合所番人与力

廿四日如此御番動ル

大沢与右衛門
山下彦右衛門

牧野宗右衛門
沢根彦左衛門

不破八右衛門
山下少兵衛

日置小左衛門
山森七郎右衛門

中西宗兵衛
山本宗左衛門

廿七日

一、三日市御旅屋セ八く、御料理所広成候指図并堺御旅屋中門ひきく候間、かもしあけさせ可申旨、対馬殿^(前田孝貞・重臣)へ申来、

一、し、ミ貝之から五斗俵ニシテ百式十俵相調可申旨、原田又右衛門^(長幸・馬廻組)へ申遣、

廿七日

一、佐藤一兵衛替野垣権丞遣候様二木戸ニ申渡、市兵衛かへり刻銅板壹枚付越候様ニ申付、

廿八日

一、江戸御着、御機嫌伺継飛脚被遣、

一、竹来春廻シ候様、黒坂・葛野・三嶋方へ状遣入、

十一月三日

一、天玄発微帙出来ニ付、会所^に江戸へ上候付、松長永三方へ添状遣、

一、大経師や七左衛門御用相済候ニ付、銀子三拾枚・絹五足被下、罷帰、則右之通江戸へ申遣、

一、三日市御旅屋入用、御材木新川手寄之山ニて切出候様ニ山奉行へ被申渡候様、算用場手紙遣、則木数、大工書付も遣、

一、中村弥五作^(馬廻組)十一月六日ニ発足、則添状遣、

一、し、ミの貝から、最前八百式十俵調候様ニ原田方へ申遣候へ共、五^{〇其迄}入申間敷ニ付、六十俵程調候様ニ重而申遣、郡奉行へも申渡、調候様算用場申遣、

一、江戸御着之旨申来候付、御着目出度旨、継飛脚被遣、

一、桜井新左衛門・飯嶋久右衛門材木歩付奉行則歩頭へ申渡、

一、残有之膏、歩行小頭・御小人頭・御算用之者・役懸歩行森川五郎右衛門・坊主頭・御扶持人大工、右之者共へ被下、

一、玉様丸^(泉脱力)・金屋々敷両池ほらせ、奉行板坂吉丞・足田半平^(城番馬廻)申渡入、

一、日用直段先跡々ノことく七分五厘ニ割場^に日用頭へ申渡、相極ル、

一、くさまき板数六百、津田内蔵助被下、

十二日

一、高岡瑞龍寺御作事御材木川流人足多人候由御奉行断二付、正月之内百姓手透二可有之候条、篠嶋豊前与力断次第日用申付、相渡候様二津田右京・金森長左衛門へ申遣、

一、岡本丹波二被下知二百石分当物成代銀結目録調可申哉之旨、さん用場断二付、早々調可遣旨申遣候、

十九日

一、惣百姓御普請廿日迄勤、廿一日あけ可申旨、割場奉行へ申渡、

一、銀子貳百貫目前田対馬二御借被成、加判人、前田権之助・前田平大^(火消役)夫・不破彦三^(為員・奥番)

一、同百貫目奥村河内二御借被成、加判人奥村内匠^(時成)

一、同三百貫目奥村因幡二御借被成、加判人横山左衛門^(忠次)

但、内百貫目京都二而渡ル、

一、御料理人届賃、上吉刃三分、中吉刃式分、下吉刃壹分相極、

廿二日

一、埋忠仁左衛門江戸へ被遣、銀子五枚被下、廿六、七日当地発足、

一、松下かり遠所之百姓共あつまり候へハ、めいわく仕旨二付、当秋前与力御奉行にて百姓之透を見斗、山近所之ものニおろさせ、村切二直段ヲ極、百姓二売渡シ、高利取不申様ニ申渡、百姓商賈仕候由、御さん用場へ申渡旨、

正月四日

一、御的矢江戸へ申来、吉田左近^(茂勝・對手執許)・吉田平兵衛申渡、

一、上方へ御荷物御取寄せ之才料身代四、五百石之衆御馬廻与頭へ申遣、

六日

一、去年松前へ調来候鷲・鷹・嶋梟ノ尾何も江戸へ可上旨被仰出、繼

飛脚を以、吉田忠左衛門方へ今日六日二遣申候、

一、御弓吉田左近・吉田平兵衛・左近せかれ、平兵衛せかれ五人式張充削上候様ニと御意候間、忠左衛門方へ申来、則左近・平兵衛二申渡、御好之目録渡し申候、

一、才川桜留向川除崩家なともあぶなきよし、里見七左衛門被罷出、理尻御奉行与力兩人申渡、町奉行指図次第御普請仕候へと与力頭へ申遣候、割場へも右之通申渡候、

一、上方御使浅賀権之丞被遣事、

正月九日

一、新川郡松倉金山つるに付候由二而、跡々五百目之かんせう八無之候得共、五百目望相極候処二つるよきに付而忠三郎・久兵衛と申もの式貫七百目二望書付を出し候付而、則九兵衛・忠三郎二被仰付候跡之山仕太右衛門にくき仕合候へ共、先其分二而、追而可有談合候、其通津田宇右衛門・駒井主水郡奉行へ申渡候、

正月九日

一、郡なによりす新敷金・米上ル事出来候ハ、郡奉行手前二而致吟味ヲ、入ヲ立、取立八十村可仕由、郡奉行・算用場へ申渡候、

正月九日

一、才川・浅野川川除御普請奉行定役二いたし、切て打廻り、悪所候ハ、まえかとも修理可仕旨手紙ヲ被遣候、下奉行入候ハ、寄合所へ可断旨、御普請奉行へ御申渡候、

正月九日

一、当年登米、岡廻御奉行与力六人入候付而、致用意可被極置由、津田宇右衛門・駒井主水方へ与力奉行へ可被申渡旨、宇右衛門・主水へ申渡候、

正月十九日

一、兼松小右衛門銀子六貫目御かし二付、除知百石いたし、連々を以可上旨、御さん(尊)用場へ申渡、

廿七日

一、繁久寺客殿ノ箱棟廻り之塀破損被致候様、杉江兵介(馬廻)ニ申渡、

廿八日

一、矢師金右衛門御給金当年ら春老枚・暮老枚両度ニ可被相渡旨、宮川五右衛門・古沢加兵衛方へ申渡ス、

一、御給銀九拾目老人半扶持 御土蔵小者市蔵此通被下旨、宮川五右衛門・古沢加兵衛方へ申渡ス、

二月三日

一、日樂伊兵衛江戸へ被為召二付、上下三人ニ而罷越旨割符所へ申渡、

一、中田之御旅やをこほち取 東岩瀬へ御建被成 御奉行杉若九左衛門・高崎半九郎(小宅)へ申遣義、日用人足何ニよらす能様ニ肝煎可申旨、高岡上村・千田河西郡奉行へ書状遣、

二月八日

一、御長柄小者給銀之儀二付、対馬殿・民部殿(今依近藤重臣)状写下割へも遣、

二月十二日

一、す三二千俵か三千俵・ころ百たなか二百たな被召上、御城へ上ケ置事、窪田・宮崎ニ申渡、(美知会所奉行)

一、古塩箱三つめ申事、五千俵有之由(会所奉行)

一、三ノ丸ちりふせき八老尺四方ノ石ヲ以、可仕事、(馬廻)

一、さま石齊藤長兵衛へ申渡、(安次・割場奉行)

一、むかいやしきやくら上ノ重さま窓も出からしノことくニさま一つ分出し可申候事、内ニも上下共二口ヲ付、ひらき戸ぬりかくしをき可申事、土へい下やくら下戸室山石にてひかへノある石にてつき可申事、沢田弥一郎ニ申渡、

二月十六日

一、餌割奉行原儀右衛門やしき替仕二付、引科可被下旨、御普請奉行へ申渡候、

一、御鷹師林孫三郎・山崎熊之助手相鷹餌割帳紙可相渡旨、会所へ申渡、

廿五日

一、小津金吹銀座家之事、当町奉行ら致指図、岡田十右衛門へいたさせ候様ニ申渡、

三月六日

一、秋田ニ而相調御材木、最前此方ら被仰付目録之外すほん四千丁調候間、舟其心得いたし可越由、寺西新七方(直武・馬廻)へ申越候、則舟式艘遣候、運賃惣な三二前銀を渡可遣哉と新七へ尋遣候、いかにも惣材木な三二遣可申旨、新七(後輩)申合遣候、(合方)

一、あら木之御弓五挺出来候付而今日認、明七日指下候様ニと会所へ申渡認申候、

一、高岡御鳥屋破損、修理候様、惣八・権平断書付三状添、上村・千田方へ遣、

十二日

一、鉄炮稽古所土塀中ぬり可仕旨、御奉行中嶋左助・渡辺彦左衛門断候故、一段尤之旨、并番人請縮之儀、わり場(割)申付候様ニ申遣、

一、放生津三白土有之由、御さん(尊)用場ら申来、

一、河原御関所之柵木くさり候間、取替度旨、原与三右衛門書付出候付、山奉行方ら相渡候様ニさん(尊)用場ら可被申渡旨申遣、

十六日

一、銅吹前銀御借事、会所へ申渡ス、

四月九日

一、御鷹師七人御餌指三人、去年江戸ら御供仕、則御借シ金有之候付、

利足之断申候処ニ御定之通、去年分八利足被成御赦免、当春⁵利足出候様ニ会所へ申渡候、

四月十九日

一、御指矢弓百張斗御用之由江戸⁵申来、御土蔵改候へ八、三十張計有之、残分上方へ急速調候様ニ申遣候、御弓打一人上方へ可遣由御射手頭会所へ申渡、

五月九日

一、^(松平定重・桑原新七)越中殿奥様御料人之事、和田数馬^(小姓)ニ申渡、
一、瑞龍寺瓦不足之給図、原五郎左衛門へ渡遣入、
一、今津破損之儀、山瀬加兵衛罷登、則可申渡、

六月三日

^(朱書)
付札

小松御普請三巻轆轤入候付て、御作事へ相尋候処ニ木無之由申故、庄川原へ捲²遣候、奉行・与力一人遣候、

一、小松御城堀之藻^本取候人足并、惣構竹巻人足年々町夫出可申、破損奉行手形を以可渡旨、状被遣事、

六月六日

一、御鉄炮奉行帳切手紙請取度旨断ニ付、則御老中へ窺可相渡旨、会所へ申渡、

一、所々ニ而稽古仕損筒岡嶋^(一信・異風裁許)五兵衛・福嶋^(異風頭)武左衛門請取、鉄炮奉行へ渡置候様ニ右兩人へ申渡入、此段御老中へ窺、

一、岡嶋五兵衛・福嶋武左衛門預り足輕、鉄炮稽古帳惣並ニ割場へ可渡置旨右兩人へ申渡、此段御老中へ窺、

一、鉄砲台木引わらせ候儀最前生熊仁右衛門・桑原新七ニ被 仰付候間、唯今も作事場ニ而小割いたさせ、異風頭可被請取由申渡、

一、筒乱之緒ノ儀、会所へ申京都⁵かなを取寄為打可被申旨、異風頭へ

申渡、

六月九日

一、御弓奉行帳切手紙請取度旨断ニ付、可相渡旨会所へ申渡、
一、瑞龍寺本高色々其外可入道具共之儀、杉江兵介断ニ付、御老中へ窺候へ八、寺社奉行手前ニ而相調させ可申旨被 仰付、其段寺社奉行并杉江兵介ニ申渡、

一、御露地ニ而室外仕候小人里子ニ可申付由ニ而江戸⁵被指越ニ付、算用場へ渡し里子可仕旨、割場奉行へ申渡、

一、^(同力)富田甚九郎事、藤田八郎兵衛ニ相尋候処、一門之者共ニ預置由申候、
一、松前へ罷越御鷹師共、銀子借用仕度旨申ニ付、会所銀かし可申旨、御老中被仰渡、則宮崎^(馬廻)弥左衛門ニ申渡、

一、御自分御普請ニ遣申芋無之付而御作事奉行断候間、買上三可仕由申渡、芋時三五千貫目も壱万貫目も一度ニ被召上可然由、御老中被仰付、其段宮崎弥左衛門ニ申渡、

七月六日

一、江戸の替銀之儀与頭無キ者八、其身書付内膳・七郎兵衛添書可仕旨御年寄衆御申之事、

七月廿二日

才村弥右衛門

奥田四郎左衛門

沢崎四郎兵衛

福岡半右衛門

右兩人充与合田上村・野田山御蔵立申奉行被 仰候間、御作事へ罷出、加藤惣兵衛受指図候様ニ、可被申渡旨、式部・織部へ状遣候事、